

●事例紹介●

プロジェクトを基礎とした  
人系研究者養成

立命館大学大学院先端総合学術研究科の試み

渡辺 公三

(立命館大学大学院先端総合学術研究科長)

「魅力ある大学院教育」の探求

今、日本の教育体系の様々なレベルで大きな変化がうまれている。大学院における研究者の養成も、例外ではない。立命館大学では当時、副学長であった長田現総長のイニシアティブのもとで一九九六年から大学院の根本的な見直しと「新構想大学院」の検討が始められた。

その基本にあった考え方は、「欧米へのキャッチアップの時代が終わった今、マニユアル重視でない真に創造性をもった研究者をどう育てるか」という課題だった。数年の

論議を経て、構想の骨格が固まり、二〇〇〇年に新構想大学院設置委員会が発足し、三年をかけて二〇〇三年四月に先端総合学術研究科が発足した。

この三年間の準備過程で問われた課題は、まさに、今、研究者を志望する学生にとって「魅力ある大学院」とは何なのか、という探求だったと言つて過言ではない。今回の「魅力ある大学院」イニシアティブに申請し、この構想が評価されたことは、こうした私たちの試みが一定の評価を与えられたことと受け止め率直に喜んでいる。

「魅力ある大学院」イニシアティブの趣旨は、研究科専攻の現状を踏まえ、どのような新しい大学院構築の方向を示

せるか、という点にあった。先端総合学術研究科は三年前の発足の時点で、今後の大学院教育を先取りするべきものとして構想されていた。そのプロジェクトを基礎とした新しいタイプのコースワークの考え方を簡潔に紹介し、設置準備の過程で取り組んだ課題と私たちの回答を示し、カリキュラムの構成とその狙い、現在行っているプロジェクトの取組、そしてこの構想をいっそう高度化する方向について述べてゆきたい。

#### プロジェクトベーストプログラムの考え方

真に創造性をもった新しいタイプの研究者を育てるという目標を達成するために、既存の学部が付属する研究科とは異なり、研究活動を活発に展開してきた学内の研究所・センター群と連携して先端的領域の開拓を図る、一貫制博士課程による独立研究科という基本的な理念が提起された。それが、一、二年次の基礎的修練と三年次以後のプロジェクト研究への参加によって院生教育を組織的に展開する本研究科である。

大学という組織全体から見れば、既存の学部といういわば強靱な足腰を欠いた独立研究科が成立するには、大学運

営責任者の強力な指導力を中心とした全学の支えは不可欠であり、そうした現実的な条件からも、この大学院構想は、「魅力ある大学院」イニシアティブが求めている大学トップのリーダーシップなしには成立しえなかつたともいえる。そうした現実的条件は措くとしても、研究所・センター群との連携によるプロジェクト研究を基盤とするという基本的な発想は、教育体系として、ただちにいくつかの特徴を生み出すことになる。

すなわち、プロジェクト運営の実践の中で研究力量を鍛えること（広義のOJT・オンザジョブトレーニング）ということもできる。プロジェクトが成立するために、院生自身の強い問題意識と明確な研究テーマが求められること。そうした院生の問題意識を尊重し、伸ばしつつ統合できる柔軟なプロジェクトを立ちあげること。プロジェクト運営をスキルとして教育しうるプログラムであること。「魅力ある大学院」とは何よりも、院生自身のもつ研究テーマを深め、博士論文に結実させうる場であればならない。こうしたプロジェクトを基礎としたプログラムを私たちはPBLにならってPBP（プロジェクトベーストプログラム）と呼びたい。

#### プロジェクトの理念

プロジェクト研究を軸にするとしても、個別の研究課題がばらばらに追求されるだけでは研究科としての求心力が削がれ、新たな研究領域の開拓もはかりがたい。こうして申請書に示した研究プロジェクトの基本的な考え方が導かれた。すなわち

「先端総合学術研究科先端総合学術専攻は、二〇世紀における自然科学の発展のインパクトを受けとめつつ人文学系分野を批判的に再構築する能力と意欲をもった研究者を養成することを目指している。学問の刷新を「先端性」と「総合性」の両面から押し進めるといふ野心的な試みである。

このような目的を達成するため、①「核心としての倫理（コア・エシックス）」を基軸とし、②人文科学、社会科学、自然科学の三分野を横断する先端的で総合的なテーマ設定を持った、③オープンな研究者ネットワークの構築と多様な成果獲得を目指すプロジェクト研究を活用した、④時代的要請に応えうる柔軟な構造を備えた教育システムを構築する。世界の現実の動向との接触面で

あり、新たな学問的課題が産出されるべき先端領域として「公共」||公共性の再定義、「生命」||生命・環境の倫理、「共生」||多文化・多言語主義、「表象」||ディジタル時代の芸術表象、の四つのテーマ領域を設定する。

各テーマ領域のもとで三人の専任担当者が研究プロジェクトを展開し、院生がテーマを共有しそれらに参加する。学部を基礎とした研究科とは異なり、ディシプリン中心からテーマ中心へ、プロジェクト中心への転換である。四テーマ領域は倫理的な問題意識の共有という点ばかりでなく、内容的にも相互に連環しており、既存の「系・分野・分科」区分とは必ずしも対応しない

こうしたプロジェクトの理念は、「コア・エシックス」といふ新しい時代が必要とする倫理を、具体的な課題に即して追求する、広い意味での人文社会科学の探求と呼ぶこともできる。

#### プロジェクト担当者の要件

それぞれのテーマ領域のもとで、三人の専任担当者がより具体的なテーマでプロジェクトを推進する。例えば「生命」では、「生命論の理論的争点」「生命操作技術の倫理」「生

物の多様性と環境の現代」という個別のテーマ設定がなされ、それぞれ哲学、科学史、生物学の専門家が担当する。こうした担当者には、「魅力ある大学院」を成り立たせるためのいくつかの力量が求められる。いわば、象牙の塔ともタコツボとも異なった場所で活動する研究スタイルが求められるともいえる。まず、それぞれの専門領域を基盤としながらも、プロジェクト研究として展開するためのより広い視野と、隣接領域の専門家にもアピールして、多角的に問題にアプローチできる共同研究の体制を作りうる能力、つまり複数の研究者を募ってグループを作る求心力である。

グループを研究のための資金面で支える力、つまり受託研究、民間財団等、種別を問わず様々な研究費を獲得してプロジェクト運営を保証しプロデュースする力量も必須である。幸い、先端総合学術研究科の専任スタッフは科学研究費補助金への申請率も取得率も、学内でも群を抜いて高い水準を示しており、これが重要な研究基盤となっている。そして、とりわけ重要なのが、院生たちがかかえる個別のテーマを、その研究動機から深く理解し、その研究を研究科のミッションにはかならない博士論文の完成まで指導する教育の力量である。ここにはまた、院生各自のテーマが、既存のディシプリンのどの学会ともっとも適合し、研

究内容を発表してその分野の専門家からの評価と批評を受けるのが適切かを考え、どの学会に参加すべきか適切な助言を与えるという重要な力量もふくまれる。四つのテーマ領域、そのそれぞれに含まれる個別プロジェクトと院生各自の研究テーマの擦りあわせは、専任以外にさらに三人の兼任あるいは非常勤講師が参加する、一、二年次を対象とする「プロジェクト予備演習」という演習科目における報告と討議を通じて行われる。次にこうしたカリキュラム構成の特徴を示そう。

#### カリキュラム構成の特徴

カリキュラムは大きく基礎講読演習、応用講読演習、講義科目、演習系科目、そしてスキル系科目から構成される。基礎講読演習は二コマ連続で和文テキスト、外国語（主に英語）をほぼ半々の量で講読し、とりわけ読み取ったことを基礎に議論する力をつけることを目的としている。人文社系の様々な分野に通底する倫理的なものの見方を理解し基軸としての「コア・エッセンス」を深化することに主眼を置く。

応用講読には四つのテーマ領域ごとのテキスト講読、講

義科目には四つのテーマ領域ごとに、その主題がいかに形成されたかを講義する形成史と、今日ももっとも緊急な主題を扱う二つの各論が置かれている。例えば「生命」では「ジエンダーと生命」「生命と環境の再考」という科目である。これらは専任の担当者が講義に当たる。また「特殊講義」として各テーマ領域でもっとも今日的な研究を進める担当者を招いて開講しており、その内二科目は海外からの招聘によって外国語（主に英語）による集中講義を行っている。講義系科目は、四つのテーマ領域を、いわば形成途上の新たなディシプリンのかたちで教授する場とも言える。

演習系科目としては、一、二年次のプロジェクト予備演習Ⅰ～Ⅲ、そして三年次以上のプロジェクト演習が置かれ、予備演習は二年次の終わりに提出する「博士予備論文」の準備としての報告と論文の執筆を、プロジェクト演習では専任担当者の主催するプロジェクトへの参加と博士論文準備のための専任担当者による個別あるいは共同の指導が行われる。演習系科目が博士論文完成を最終目標とする論文指導の中心軸となる。

スキル系科目は本研究科に独特な科目群であり、IT機器をつかった伝達スキル、英語を中心としたライティングのスキル、プロジェクト運営のスキル、人社系に共通する

方法論（質的研究法としてのフィールド観察、インタビュー法等）の修得を可能とする。

#### プロジェクトの様々な取組

論文指導の軸としての演習を中心として講義科目、スキル科目によって育成される研究能力は、プロジェクト演習の主要な部分となるプロジェクト研究で、学外の第一線の研究者や他大学も含むODレベルの研究者などの報告を聞き討議し、自らも研究報告を行って批判を受けることによって実地に鍛えられる。そうした成果としてすでに市販の雑誌の特集号への院生と専任担当者による寄稿（「争点としての生命」「生存の争い」）、『生命の臨界』という表題の市販の論文集の刊行を行った。さらに様々なかたちで開催されるシンポジウムやプロジェクトの一環として開催される公開研究会等で実践的に鍛練される。

「生命」テーマ領域のいくつかの取組を紹介しよう。「生命科学技術と市民の関係を構築する」プロジェクト研究の一環として、難病の患者の人々の作る会の核となって活動する患者さんを招いて報告会が行われた。この会の準備から運営まで、院生自身が重要な役割をになった。また同じ

4月	1年次	入試合格 入学	(現在のプログラム) 入学前ガイダンス、面接、参考文献リストの提示 研究科メーリングリスト・各種研究会への参加 指導教員(3名)申請書・研究計画書提出→面接指導
9月	1年次	プロジェクト予備演習受講 進共同研究員	
4月	2年次	基礎科目・サポート科目受講	1セメスター1テーマでの演習 担当者による演習、博士予備論文報告会、個別指導による研究課題の絞り込み 基礎共通科目・基礎専門科目・サポート科目の受講
7月	2年次	プロジェクト科目受講	博士予備論文報告会における公開研究発表(博士予備論文構想のプレゼンテーション)
1月	2月		博士予備論文提出(1月末) →審査・口頭試問(2月中旬) →プロジェクト研究参加のための資格判定 →結果発表(2月下旬)
4月	3年次	プロジェクト演習受講 プロジェクト共同研究員	論文指導スタッフによる基礎指導を受け、博士予備論文を作成
4月	4年次		研究科長・主事、テーマ責任者、 <u>研究プロジェクト・マネージャ</u> 二との協力でコーディネートされたプロジェクトに共同研究員として参加 海外留学するが、 <u>留学中にも継続した体系的な研究指導</u> を受ける 海外での学会発表のために、 <u>外国人スタッフによる論文とプレゼンテーションの指導</u> を受ける
4月	5年次		研究テーマに適合したプロジェクト研究に共同研究員として参加。その他のプロジェクト研究にも準共同研究員として参加することが可能。共同研究員として参加するプロジェクト研究においては、一研究者として研究成果の発表の義務を負う。
4月	5年次		博士論文構想発表会による公開研究会(博士論文構想のプレゼンテーション)
12月	5年次		課程博士論文提出(12月末) →口頭試問(1月) →公聴会(2月)
3月	5年次		課程博士学位授与

(今次申請プログラムを活用したモデル例)

サポート科目の履修において工Aの援助により研究テーマに関するアンケートやインタビューを実施、博士予備論文の作成に向けた調査資料とする。

論文指導スタッフによる基礎指導を受け、博士予備論文を作成

研究科長・主事、テーマ責任者、研究プロジェクト・マネージャ二との協力でコーディネートされたプロジェクトに共同研究員として参加

海外留学するが、留学中にも継続した体系的な研究指導を受ける

海外での学会発表のために、外国人スタッフによる論文とプレゼンテーションの指導を受ける

院生のイニシアティブで国際研究集会を組織

シンクタンクから招聘された講師との研究交流を行い、研究者レベルのインターンシップに参加したことがきっかけとなり、企業における研究職に内定が決まる

く「生命」テーマ領域のゲストスピーカーとして台湾出身で、英語で成果を発表している疫病史の研究者による英語でのレクチャーを開催し、事前のレクチャー原稿の受領、英語による質疑等、会の運営全般を院生がこなした。こうしたプロジェクトの実践では、研究者以外の市民との接点、海外の研究者との交流などが貴重な経験となる。

さらに今年度ではアマルティア・セン、ハーヴァード大学教授などを招聘して一〇月に開催された国際カンファレンス「経済・法・倫理―不正義に抗して」における報告原稿の翻訳と会議の運営も、様々な課題も含めて貴重な経験の機会となった。その報告内容は報告書および市販の論文集として刊行の予定である。こうした経験からの教訓を踏まえて、次年度以降は集中講義への海外研究者の招聘を、院生自身の発意に基づいて行うなどの新しい試みにも、研究科として取り組むことになっている。

いっそうの高度化に向けて

三年前の開設時の研究科の姿が、すでに新しいかたちのコースワークによる大学院教育の提起であったことはすでにふれた。開設準備過程で発行したニュースレターのタイ

トルにも掲げたとおり、この研究科の確立そのものが一つの大きなプロジェクトでもある。開設以来三年間、私学として旧国公立の研究科にくらべて学費の点ではハンディがあるにもかかわらず、多くの受験生が受験し、熱意に満ちた院生が入ってきてくれた。専任教員たちに劣らず、院生たちもまたそれぞれが個性的な、明確なテーマをもった一匹狼の風貌をもっている。と同時に研究における協働の価値を重視している。院生たちが熱意を持って研究に励んでいることは、学会への加入と学会での報告、旺盛な様々な執筆活動にも顕れている。

こうした熱意をいっそう生かすためにも、研究科の軸としての演習系科目における論文作成の修練をより高め、スキル系科目の院生にとつての使い勝手の向上をはかり、プロジェクトのよりいっそう効率的な運営の体勢をつくり出すことが、「魅力ある大学院」イニシアティブに採択された現在の研究科の課題である(図)。